中国における俳句の受容

——俳句と漢俳の交流を中心に——

朱　　實

はじめに
1　俳句・漢俳交流句会
2　交流の懸橋としての翻訳
(1)　俳句の漢訳
(2)　漢俳の和訳
(3)　今後の課題

はじめに

中国と日本は地理的に一衣帯水の隣邦で，歴史的には二千年にわたる友好交流があった。

俳句と漢俳を通しての日中文化交流は長年にわたり，かなりの成果をあげている。

中国における俳句理解，俳句の中国文学への影響は，その他諸外国との場合と根本的に違うところがある。もともと俳句そのものが中国文学・漢詩の影響なしには存在し得ないと考えられるからである。ところが今日では，俳句が「漢俳」として中国に逆輸入されている。これは，中国文学を父とし，日本文学を母とした俳諧の，「漢俳」という形態での「里帰り」現象であるといえよう。

本稿では俳句・漢俳交流の実体及び交流に不可欠な俳句の漢訳・漢俳の和訳，更には今後の課題などについて，実作例を引用しながら論述してみたい。

1　俳句・漢俳交流句会

俳句と漢俳の交流は，1980年に端を発している。同年5月，中日友好協会の招きに応じて，社団法人俳人協会第一回訪中団（会員以外の俳句関係者も含め）一行21人が，大野林火を団長として訪中した。その折，中国に「漢俳」という新しい詩型が生まれ，俳句の翻訳も盛んとなり，にわかに俳句が中国で脚光を浴びるようになったのである。

その後，「ホトトギス」主宰・稲畑汀子，俳文学会訪中団団長・井本農一，「あした」主宰・宇咲冬男，「冬野」主宰・小原菁々子，「海程」主宰・金子兜太，(社)俳人協会会長・沢木欣一，「狩」主宰・鷹羽狩行，「濱」主宰・松崎鉄之介，「風の道」主宰・松本澄江諸氏の率いる訪中団の訪中が続き，年を追って俳句と漢俳の交流が盛んになっている。

1992年4月中旬，(社)日本伝統俳句協会副会長・伊藤柏翠氏を団長とする同協会友好訪中団の一行40人が，北京・西安・桂林・上海を訪れた。筆者は随行講師兼副会長として同行した。北京では漢俳の第一人者である林林，李芒，袁鷹，徐放諸氏と俳句と漢俳について交流することができた。上海では俳句・漢俳交流史上初めての試みとして，「第一回日中友好俳句漢俳交流句会」が実現した。

俳句を漢訳し，漢俳を和訳したものを，日本における句会の形式で清記，互選，披講したものである。

創立早々の上海俳句漢俳研究交流協会からも「漢俳人」が多数参加し，その模様は地元の有力新聞やテレビでも大きく取り上げられた。

『文匯報』は交流句会の方法をくわしく紹介し，披講師が皆の前で，選者の名前と，その選んだ一句ずつを読み上げ，自分の句が読み上げられた人が手を挙げて，名乗りを上げる場面を感動深く伝えている。そして，坊城中子副団長が最後に「中国はすばらしい国です。今後ともこの様な交流をつづけ

ましょう」と挨拶したのが，拍手喝采を受けたと結んでいる[1]。

『解放日報』は交流句会が日本の俳句会の方法で行われた模様をつぶさに紹介し，伊藤柏翠団長が「李白，杜甫，王維の詩が早くから日本に伝わり，日本文化は中国文化の影響を受けてきた。俳句と漢俳の交流によって，その恩恵の万分の一に報いられることを願っている」と挨拶したのを取り上げ，上海俳句漢俳研究交流協会羅洛顧問が「今度は第一回であったが，第二回・第三回交流句会が引き続き行われることを望んでいる」と挨拶したことを報じている[2]。

会場はガーデンホテルの大宴会場。元フランス租界のナイトクラブのダンスホールだったところ。きらびやかなステンドグラスの天井が歴史を物語っている。「漢俳人」たちは，漢訳された作品によって俳句を知り，日本の俳句会を理解することができた。日本の俳人たちは，和訳された作品によって漢俳を知り，感銘することができた。「一つの国を理解するには，その国の言語，風土，文化，歴史そして人間を知らなくてはならず，それがあってこそ初めて相互理解と認識が生まれる。そしてその必要性は時代を越えて共通する課題でもある。」[3]

この意味で俳句漢俳交流句会は，日中友好と相互理解を深め合い，和気あいあいのうちに大成功を収めたといえよう。

日本伝統俳句協会評議員・藤浦昭代氏は，漢俳の旅に参加した感想を次のように述べている。

「一昨年，ドイツでの国際交流俳句大会にも出席したが，ヨーロッパでは日本の俳句を理解するというより，独自の楽しみ方で楽しんでいる感じであったが」，今回は，「さすがに同じ漢字国同士，俳句を本気で理解しようとしておられることが分かり，非常にうれしい旅であった。」[4]

2　交流の懸橋としての翻訳

国際文化交流において，翻訳の果たす役割は大きい。交流が成功するか否かは，翻訳（通訳も含め）に負うところが少なくないといっても過言ではないだろう。

詩歌・俳句の翻訳は，とりわけ難しい。

中国人にとって，俳句は分かりにくいので訳しにくい。たとえ意味がそれとなく分かってもうまく訳すのは難しい。だから十数年前までは翻訳が非常に少なく，中国の読者もあまり俳句を知らなかった。文化交流の上からみて，お互いに相手国の作品を翻訳し紹介することは，大事な仕事であるといえよう。

筆者所蔵の資料を調べた限りでは，俳句・漢俳の交流が盛んになってから，下記の著書や翻訳書が出版されている。

(1)　葛祖蘭訳注『正岡子規俳句選訳』（上海訳文出版社，1985年12月出版）

(2)　林林訳『日本古典俳句選』（芭蕉，蕪村，一茶の句，選訳。湖南人民出版社，1983年12月出版）

(3)　林林訳『日本近代五人俳句選』（子規，漱石，碧梧桐，虚子，秋桜子の句，選訳。外国文学出版社，1990年12月出版）

(4)　李芒編訳『山頭火俳句集』（浙江文芸出版社）

(5)　彭恩華著『日本俳句史』（学林出版社出版）

(6)　瞿麦訳『與大自然対話　俳句入門』（稲畑汀子著『自然と語りあうやさしい俳句』中国語版。永田書房，1988年11月出版）

(7)　『中日漢俳俳句選・杜鵑声声』（漢俳編集・冰夫，冒蔭寰。俳句漢訳・朱海慶，監修・瞿麦。国際展望出版社，1992年4月出版）

最後に挙げた『杜鵑声声』は(社)日本伝統俳句協会の訪中を記念して出版された中日漢俳俳句合同句集で，上海の『解放日報』『文匯報』にも作品の

一部が掲載された。

この合同句集の中から実作例を挙げて俳句の漢訳と漢俳の和訳について探究してみたいと思う。

(1) 俳句の漢訳

俳句の漢訳は，日本語の音節構造の特性により，中国語の17音節に訳すのは無理である。この問題について，中国の元対外友好協会副会長で，日本文学研究家・詩人の林林氏は次のように述べている。

「日本語は副音節で，漢語は単音節であり，言語はまたおのおのの特徴がある。たとえば，桜の日本語は3音節で，鶯は4音節，だから17音節の俳句は5・7・5の3行に訳すことはできない。もしそうすれば，原作にない多くの文字をつけ加えがちになり，言いつくしたり，言い過ぎたりする弊が起きる。俳句を漢訳する上で，すべてを5・7・5の3行に訳すことには賛成できない。」[5)]

俳句の漢訳は，中国でいろいろな試みが行われ，まだ一定した訳し方はない。むしろ5・7・5にこだわらず，原句の内容に応じて，「5・5」「3・4・3」「3・3・5」「7・7」「5・7」など長短句の形式で変化させるのが妥当ではなかろうか。

以下『杜鵑声々』から例句を挙げてみることにしよう（例句はいずれも朱海慶訳，瞿麦監修）。

1-1 「5・5」形式

老木の命をしぼり芽ぶくなり　　伊藤　柏翠

老樹拼老命
綻開新芽児

一行を断つ夏霧の蹬高し　　坊城　中子

夏霧隔山路
攀登石階高

野遊の人散らばりて草千里　　久保　八重
野遊人離散
芳草連千里

1-2 「3・4・3」形式

この一会栞りて年を惜しむかな　　藤浦　昭代
此相聚
永記心中
忘年会

鵜篝の炎といふは風に透く　　松井慶太郎
鸕鷀船
熊熊篝火
穿透風

1-3 「3・3・5」形式

町の灯も月もおぼろの上海に　　上原美久江
灯朦朧
月朦朧
懐念上海域

1-4 「3・7」形式

老いてなほ旅を恋ひをり鳥渡る　　山田　桂梧
雁南飛

人老仍恋旅遊楽

1-5 「7・7」形式

旅ごころブイに繋ぎて生ビール　　瞿　　麦

旅懐繋在浮標上

痛飲一杯生啤酒

1-6 「5・7」形式

喜雨霽るるふたたび馬は野に散れり　　依田　明倫

喜雨後初霽

馬児在原野撒歓

1-7 「4・7」形式

空に解く初穂の光りつつ芒　　小坂田規子

芒穂初開

向着天空放光芒

1-8 「4・4・3」形式

天高し還暦の友再婚す　　奥　　清女

秋高気爽

花甲女友

喜再婚

(2) 漢俳の和訳

一字一音多義で，「5・7・5」3行17音節の漢俳を「かな5・7・5」に翻訳するのも，至難の離れ業に等しい。意義的内含量が双方で随分違い，漢俳の方が情報量がはるかに多いからである。

4月18日夜，桂林から上海に飛び，ガーデンホテルに入ったのが9時過ぎ。それから上海側と翌日の交流句会の打合せ。双方それぞれ訳をつけ，無記名で清記して，日本流の句会形式で交流句会を行うことに決定。さあ，それからが大変である。筆者が上海「漢俳人」の漢俳を読み下しで訳し，伊藤柏翠，坊城中子，山田桂梧の諸氏が俳句に仕立て直し，藤原昭代，船木みえ，坊城俊樹の諸氏が清記し，翌日の交流句会に臨んだのである。徹夜の突貫作業であった。

漢俳とその和訳をご披露しよう。ちなみに漢俳には，みな題がついており，季語・押韻がある。

1　新　　年　　王　　辛笛

桃符旧換新
一年之計在于春
福禄寿相迎
　一年の計春にあり福禄寿

2　春　　雪　　羅　　洛

軽飄似飛花
銀装素裏万千家
即看春無涯
　飛び花に似たり銀色の春来たり

3　小　　楼　　于　　之

小楼花競開
窓明几浄寂寂待
客従遠方来
　遠来の客小楼の花下に待つ

4　新年聞鐘　　田　　邀

半夜寺鐘鳴
百八鐘声細細聴
新年脚歩声
　百八の鐘新年の近づける

5　喜聞日本伝統俳句協会訪沪　　田　永昌

窓前白玉蘭
折取一枝含笑看
留芳送君前
　芳しき白蘭手折る君がため

6　琵琶湖畔憶江南　　寧　　宇

碧波濯桜花
緑水青山弾琵琶
声染太湖家
　山水の青葉に染みる琵琶の音も

7　夜渡太湖　　冰　　夫

帆牽艶霞隠
一夜浪敲幾回醒
帰夢飛流螢
　太湖航（ゆ）く霞に白帆隠れけり

8　愛　　陸　　萍

来信夜夜読
万千恩愛心上過

有你不寂寞
　春愁や思ひ出たどり便り読む

9　春　　冒　蔭寰

春雨綿綿稠
万物飽飲競争蘇
百花潤歌喉
　春雨に百花競ひてよみがへる

10　山前一樹桃　　姚　村

小桃坡上青
忙煞老媼園中戒
倫児皆孫親
　桃番の婆にぬすとはすべて孫

11　遊番禺蓮花山　　趙　麗宏

石破蒼天驚
劈開野山花顕形
猶聞錘歯声
　山割れて桜花生るる如く咲く

12　南浦大橋　　郭　在精

霧失江與城
金弦偏竪倚天琴
撥響春潮声
　江一掃し琴に春潮かき鳴らす

13　聞日本俳人訪沪　　謝　其規

春濃桜又開
有朋踏波東辺来
吟俳香満懐
　春の波踏み東より朋の来る

14　在中国国際吟詩節歓宴日本友人　　曹　致佐

重陽又一年
俳歌助酒満堂歓
挙杯乾又乾
　重陽の節句の杯を重ねつつ

15　望　瓜　州　　黎　煥頤

渉水瓜州渡
荆公明月蔵何霧
雲水半江緑
　水渉る瓜州の渡（わたし）霧深し

訪中団が北京に着いた直後，伊藤柏翠団長は「再び期せざれば春深ければ」と吟じた。高齢を思うと，もう二度と中国には来られないとの思いがあったからだ。だが，中国で合同句会を開いた今は，思いを新たにしている。「中国の漢俳作家には若い人たちが多く，これからどう変わるかとても興味がある。九十になったらまた行くつもりです」「ユーモラスな句や恋愛を歌った句など，題材も広いと感じました」と，朝日新聞福井支局のインタビューに答えている[6)]。

以上の例句からも分かるように，かなり濃縮して訳されている。興味深いことに，俳句的情緒に富んだ名訳，例えば例句3，6，7，10，15にはかなり

点が入っている。

(3) 今後の課題

中国では，俳句を日本語でつくることが，各地の大学の日本語科で行われており，また，日本の俳人と中国の詩人・「漢俳人」との交流も盛んである。

1990年5月には，浙江省の杭州大学に和歌俳句研究センターができた（会長・李芒）。若い日本文学研究家が大勢この学会に参加して，和歌・俳句を研究している。

1992年4月には，上海俳句漢俳研究交流協会が誕生した（会長・瞿麦）。上海の詩人・「漢俳人」が大勢この協会に参加して，俳句と漢俳の研究・交流を進めている。

いま中国では，漢俳が子供にまで浸透している。1990年，大阪で「花と緑の博覧会」が開催された時，日航財団が大がかりな世界児童ハイク・コンテストを行った。世界三十数か国から児童ハイクが六万句以上集まったとのこと。北京・上海は初参加だったが，八千句の応募があった。1991年に続き，1992年も応募作品が集まり，その日本語訳を依頼された。

その子供漢俳を一句紹介しよう。

雲児片連片　　雲の峰
小狗小猫花様変　　犬に変わったり猫に変わったり
張張滑稽臉　　どれも滑稽な顔をしている　　（瞿麦訳）

小学3年生・周佳奕ちゃん（10歳）の作品。片（ピイエン）・変（ペン）・臉（レン）がちゃんと脚韻を踏み，雲の峰が夏の季語。夏の雲の変化を子供の目で捉えたユニークな作品で，俳諧味に富んでいる。

これは冗談だが，数年後には漢俳人口が，日本の俳句人口を越えるようなことが起こるかもしれない。

俳句の国際化が云々されている昨今である。俳句と漢俳の交流を含め，俳句の国際化といっても，余韻・リズム感・季語・翻訳など今後の課題は多々

ある。

自然という共通の母に育まれている世界中の人が，その国の言葉で俳句を作り，翻訳を通じて互いに鑑賞し合い，詩的な喜びを分かち合うことによって，諸国民間の相互理解を深め合って行くべきではないだろうか。

（本稿は『俳句研究』1992年10月号所載の論文に加筆したものである。）

〔注〕

1）俳友興会雅趣濃（1992年4月20日付『文匯報』）
2）詩人興会更無前（1992年4月20日付『解放日報』）
3）井上謙『曙光』創刊の辞（日中文化研究会『曙光』第2号，1991年12月発行）
4）漢俳の旅（1992年5月16日付『北国新聞』）
5）林林『扶桑雑記』（日中短詩研究会，1988年10月発行）
6）俳句で日中交流（1992年4月28日付『朝日新聞』福井版）